

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 9 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370828

研究課題名(和文) 洋務運動期の清朝による諸改革からみた一九世紀後半のマンチュリアにおける歴史的変動

研究課題名(英文) Historical Changes in Qing Manchuria: A Survey on Qing Political Reforms in Manchuria in the Latter Half of the 19th Century

研究代表者

古市 大輔 (FURUICHI, DAISUKE)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：40293328

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、19世紀後半のマンチュリアにおける清朝の諸改革に関する史料の抽出と整理を行い、その諸改革の背景や内容を比較して諸改革間の関連性についての検討を進め、その諸改革全体が有する特徴に関する考察を試みた。その結果、以下のような知見・見通しを得た。

(1)洋務運動期のマンチュリアにおける諸改革は、マンチュリア南部では、漢人移民や馬賊集団を実質的に把握・統制するため、1870年代から主として官制改革のかたちで推進された。(2)他方、マンチュリア北部では、馬賊の発生や1880年代前後の北東アジアにおける国際的変動の激化のため、軍事的な対応を緊急に実現すべく軍事色の強い兵制改革が推進された。

研究成果の概要(英文)： In this research, I picked up some documents on political reforms carried out by the Qing government in the latter half of the 19th century Manchuria, and focused on the relationship among the reforms through comparing each of them with others in order to analyze the characteristics of them. I have some remarks as follows.

(1) In southern Manchuria (mainly Mukden and Jilin), the Qing government began to carry out some administrative reforms in the mid 1870's in order to control and manage the Han immigrants and bandits in Manchuria. (2) On the other hand, in 1880's in northern Manchuria (mainly Heilongjiang), some military reforms were aimed at reinforcing the banner army in Manchuria against the background of the inter-regional and international difficulties in the Northeast Asia.

研究分野：中国清代史

キーワード：東洋史 マンチュリア 清朝

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者(古市)はこれまで、清代後期のマンチュリア(特に当該地域南部に位置する盛京)の社会・経済変動とその特色について、それへの対応策として19世紀後半に断行された清朝の行政改革という政治面での動きに注目しつつ検討を進めてきた。また、盛京における清朝の行政的対応の特徴やその変容を検討してきた。これを基礎にしつつ、また、清代マンチュリアにおける清朝国家のプレゼンスを重視する研究成果の助けも借りながら、近年、マンチュリアという地域全体にも注目し始め、また、研究対象としてきた時期を19世紀後半以降、20世紀初頭の清最末期に拡大し、19世紀後半、特に1870年代から1880年代のマンチュリアで断行された行財政や軍事面での諸改革に対する再検討を試み始めたところである。

研究代表者によるこの試みは、2008年以降に続けて公表した諸論文、ならびに平成21-23(2009-2011)年度に助成を受けた科学研究費補助金による研究(若手研究B)において得られた研究成果をその主なる学術的背景としているが、本研究では、そうした個別具体的な諸改革の内容に対する実証的研究の成果を踏まえ、マンチュリア・「東三省」というより広い領域をあらためて措定しつつ、それら諸改革の全体像とその諸改革によって生じた清代後半のマンチュリアにおける歴史過程の方向を論じるための検討を拡大・深化させることによって、清代マンチュリアにおける歴史変動の過程を、従来にはなかった新たな視点から理解することを試みたいと考えた。

2. 研究の目的

19世紀最後の四半世紀という時期は、マンチュリアがその政治・国際関係・行財政の各側面で大きな変容を経験した時期であり、また、マンチュリアが清朝のためのマンチュリアとされた位置づけから、近代中国の中の満洲という位置づけへの転換という大きな歴史の変容のその出発点となった時期であった。

本研究は、19世紀後半、特に1870年代から1880年代という時期をマンチュリアという地域の歴史の変容過程のなかで極めて重要な時期の一つであると仮説づけながら、この時期に実施されたマンチュリアにおける行財政・軍事面での諸改革の内容や意図、並びに、それら諸改革相互の連関性や差異について検討し、19世紀後半以降のマンチュリアにおける諸改革全体が目指した方向性や清朝によるマンチュリア統治とその方針転換のありかたについて論じることを目的とするものである。

本研究の具体的な目的としては、以下の3点を設定した。

第一に、研究代表者によるこれまでの試みを踏まえ、本研究ではその歴史的な画期・転換期に注目することを通じて、清代マンチュリアの歴史の変動をさらに立体的・具体的に描き出すことである。

第二に、1870年代から1880年代、あるいは日清戦争期に至る時期の盛京・吉林・黒龍江の三地方における諸改革それぞれの具体的内容を明らかにしつつ、そのうえで、そうした諸改革同士の連関性や連続性を検討し、19世紀後半以降のマンチュリアにおける諸改革全体が目指した方向性や清朝によるマンチュリア統治とその方針転換のありかた、さらには、諸改革それぞれの内容比較によって明らかになるであろうマンチュリアの三地方の歴史的状况・前提条件に関する差異などについても指摘できるようにすることである。

第三に、この時期のマンチュリアにおける諸改革全体に共通する方向性が、清末以降の「東三省」「中国東北」という地域的形成過程に対して如何なる作用を及ぼしたか、という問題を設定しつつ、この時期のマンチュリアの変動がその後の近代満洲の歴史に及ぼした影響について総括的に論じ、清代マンチュリアの歴史とその特徴を総合的に説明することを試みることである。

3. 研究の方法

まず、19世紀後半のマンチュリアにおける行財政・軍事改革の具体的内容を確認・検討するため、諸史料から関連記事を抽出し、史料内容の分析を進める。次に、当該行財政・軍事改革の内容のそれぞれを比較検討し、時期的な連続性や内容の相同性・相違性について検討する。さらに、当該時期の諸改革全体が有する改革の方針・意図などについて検討しつつ、清朝最末期に「東三省建省」という一応の完成をみた行財政・軍事改革の歴史的背景として、それと19世紀後半のマンチュリアにおける行財政・軍事改革との間の連続性や関係性についての議論を試みる。

上述の研究方法をより具体的に記せば、以下ようになる。

第一に、1870年代から1880年代にかけての時期に実施されたマンチュリアにおける行財政・軍事面での諸改革の内容のうち、未だ検討されていない改革についてまず検討する。これによって、本研究代表者その他による研究成果の欠を補う。

第二に、清代後期のマンチュリアにおける清朝による諸改革同士の特徴を比較検討し、それら相互の連関性や差異について検討する。19世紀後半以降のマンチュリアにおける諸改革全体が目指した方向性や清朝によるマンチュリア統治とその方針転換のありかたについて論じる。

第三に、上記二点で検証・議論を試みたうえで、1870年代から1880年代のマンチュリア

アにおける諸改革が、それ以前とそれ以後の清代マンチュリアの歴史のなかで如何なる位置づけとなるか、といった点に議論を展開する。1870年代から1880年代のマンチュリアにおける諸改革の歴史的意義を考える。

4. 研究成果

本研究では、19世紀後半の洋務運動期におけるマンチュリア(満洲、のちの中国東北部)で清朝が実施した政治・財政・軍事などの諸改革とその意図などを検討しつつ、その歴史的意義に関する再検討を試み、そのうえで、清代マンチュリアにおける歴史的変動とその特徴・意義についての新たな視点を構築することを目標に研究を進めてきた。

その結果、マンチュリアにおける政治・財政・軍事各面での諸改革に関する史料データの抽出と整理は概ね終了することができた。また、それぞれの諸改革の背景や内容などを比較し、諸改革間の関連性などについての検討を進め、さらに、その検討内容を前提に、当該時期の諸改革全体が有する特徴などに関する考察を試みた。

現時点では、それらの検討・考察内容を踏まえ、その諸改革の特徴の一端を明らかにしつつあるが、ただ、その結果を最終的な成果として公表するまでにはまだ至っていない。その刊行に向けた作業を急ぎ進めている状況である。

以下、公表にはまだ至っていないものの、現時点で得た些かの知見・見通しについて述べておくことにしたい。

まず、その概要は以下の通りとなる。

洋務運動期のマンチュリアにおける諸改革は、盛京(奉天)や吉林などのマンチュリア南部では、1860年代に、漢人移民の増加や馬賊の発生といった「マンチュリアの中国内地化・辺境化」の傾向が顕著となり、それらの集団を実質的に把握・統制するため、1870年代から官制改革(地方行政機構の中国内地化)が指向・推進された。

他方、黒龍江などのマンチュリア北部では、マンチュリア南部で発生していた馬賊への対応と共に、ロシアの清朝辺境領域への進出などの1880年代前後の北東アジアにおける国際的変動の激化によって、マンチュリアを防衛することの必要性も強く認識されるようになり、そのための軍事的な対応を実現すべく、八旗軍の再編が指向された。その結果、黒龍江を中心に「東三省練軍整備計画」が実現したが、このように、黒龍江では、盛京(奉天)や吉林のような地方官制改革とはいささか特徴を異にする軍事色の強い兵制改革のほうに主眼が置かれた。

次に、この知見・見通しを以下の四点に分けて、いくらか具体的にまとめておきたい。

(1)洋務運動期のマンチュリアにおける行政改革の背景には、「東三省官兵」や地方官の墮落に対する清朝の危機意識があり、それは同治年間以降のマンチュリアに発生した馬賊の存在とそれに対する対応の際に特に強調された。こうした背景から、マンチュリアにおける行政改革は、同治年間以降にその気運が高まり、光緒初年に実現された。

(2)ただ、マンチュリアに対する清朝の危機意識それ自体は、同治年間に始まるものではなく、道光年間末から咸豊年間にかけてのロシアを始めとする西洋諸国の圧迫もその危機意識をすでに高めていた。清朝は「辺境化」しつつあったマンチュリアにおける軍備・防衛に関しても常に注意を払いつつきてきたが、同治年間以降になると、馬賊への対応の必要性や「東三省官兵」の立て直しなどの具体的な施策が度々叫ばれたため、同治末年から光緒初年の時期(1870年代)にはまず、官制改革がマンチュリア南部(盛京(奉天)・吉林)を中心に実施され、さらに、その後の1880年代にはマンチュリア北部(黒龍江)を中心に「東三省練軍整備計画」が実現した。

(3)前者の、マンチュリア南部で実施された官制改革は、同治年間以降に「辺境化」しつつあったマンチュリアでの対ロシア政策の一環として意図されたものというよりはむしろ、そのマンチュリアで発生した馬賊への対応や治安維持の必要性、さらには、その対応の際の主体となるべき「東三省官兵」の疲弊・墮落からの回復を試みる意図のもとに計画・実現されたものと考えられる。一方、後者の、マンチュリア北部を中心にした「東三省練軍整備計画」は、1870年代には馬賊討伐の未完了やマンチュリアにおける財政難などの諸条件によって延期されていたが、1880年前後のロシアとの緊張激化のなかで、マンチュリアにおける防衛の重要性が再び重視され、さらに、日本も関わるようになった「朝鮮問題」との関わりをも強めるようになり、マンチュリアにおける軍隊の再編の必要性が現実味を帯び、その結果として、その整備計画がようやく実現されたと考えられる。

(4)総じて、洋務運動期には、1860-70年代から顕著となった馬賊への対応の必要性をその素地としつつ、そこに、1880年代前後に本格化したロシアや日本に対する国際的な対策の必要性が加わり、それらの重なりを背景に、マンチュリア(「東三省」)を行政的かつ軍事的にも一体化させるという必要性が清朝内部で強まっていた。こうした状況下で、洋務運動期のマンチュリアにおける諸改革が断行されたといえよう。すなわち、まず1870年代に盛京(奉天)・吉林における官制改革が推進され、1880年代に入ると黒龍江における軍事色の強い兵制改革たる「東三省練軍整備計画」がそれに継いで実現したのは、こうした背景があったと説明づけられよう。

以上が現時点での知見・見通しであるが、本研究では、清朝の最末期(20世紀初頭)にマンチュリアで実施された行財政・軍事改革や、同じ19世紀後半に実施された洋務運動などの比較を行い、19世紀マンチュリアにおける清朝の諸改革の歴史的な位置づけを複眼的に考察することも若干は試みたものの、こちらもその知見を公表する段階までには至っていない。今後この考察を残された課題の一つとして、鋭意進めていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

古市大輔, 19世紀後半における清朝の対マンチュリア認識とその変化 「東三省」の語の用法の変化にみるマンチュリアの「辺境化」, 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇, 第7号, 1-52, 2015, 査読無し

古市大輔, 清代嘉慶・道光年間における「東三省」の語とその用例・用法 19世紀前半の清朝の対マンチュリア認識の特徴にも触れながら, 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇, 第6号, 1-42, 2014, 査読無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古市 大輔 (FURUICHI DAISUKE)
金沢大学・歴史言語文化学系・教授
研究者番号: 40293328

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし